一章 取り戻す者たち

白い大地にえられた雨水が、巨大な鏡となって広がる。

　隆起のない平地は視界をることがない。青空の光を鏡面の大地が照り返し、全方位にが続き雲が流れる。鏡映しになった天地が上下に連なった風景は見る者の距離感を喪失させ、風景の中にいる人物が球形の美しい世界に閉じ込められているかのような錯覚を引き起こす。

　千の言葉でも語り尽くせない絶景の中、メノウは目の前の一人に意識を集中させていた。

　メノウと同じ色の神官服を身にった、どこか不吉な雰囲気を漂わせる長身の女性だ。赤黒い頭髪を短く切りえている彼女こそが、メノウを処刑人として育てあげた人物である。

　伝説の処刑人、『』。

　青と白の二つの色彩の中、彼女の赤黒い髪はっていた。左手に持つ教典が導力光を帯びながらも、教典魔導を行使する気配はない。反対の右手に持つ短剣は、ぴたりと切っ先をメノウに合わせてあった。

　メノウもわずかなも見せることなく、短剣を構える。発動させたままの導力の糸が風にそよぐ。黒いリボンでくくった色素の薄い栗毛のポニーテールもわずかに揺れる。

　幻想の世界にあって、二人の間にある空気は濃密だ。

　師弟の対峙から少し離れた場所には、もう一人。品のよい服装の少女がいる。

　日本から来た異世界人、トキトウ・アカリである。

　聖地から塩の大地まで続く戦いは、純粋概念という強大な魔導を秘める彼女を巡って引き起こされた。

　メノウとアカリがともに生きる道を進むか。

　それとも、ここでに『』に殺害されるか。二人の命運を決める戦いだ。

　この戦いを始める前に、いまのメノウとアカリは互いの心を感応させ合っていた。

　人間の魂から生成される導力の相互接続。メノウの特異な体質と二人の心身を預け合う信頼関係が生んだ深いレベルでの【力】の接続は、心の動きのみならず互いの人生を追体験させるほどのつながりを生んだ。

　メノウとアカリの組み合わせでのみ行使できる導力の一体化は、彼女たちを魔導的な同一人物にした。

　メノウの中にアカリがいるし、アカリの中にメノウの意識がある。

　確かにつながったアカリの思いがメノウの中を巡って背を押す。熱となって心を燃やす。自分らしくもない熱さで、感情の熱はアカリがメノウを思う気持ちそのものなのだ。アカリから流れる【力】がとなってメノウの闘志を奮い立たせる。

　静かに、静かに近づく。

　状況的には、が圧倒的に不利。メノウはアカリから導力の供給を受けることで、この世界でもトップレベルの出力を得た。導力操作という点ではの中でも上位にいるメノウが、異世界人の圧倒的な導力量を扱えるのだ。

　その脅威を理解していないはずもないのに、伝説と呼ばれた女性はりを見せない。

　に動けば均衡は一瞬で崩れる。

　ぴんっと張り詰めた空気の中、二人の距離が縮み始めた。速すぎるからではなく、あまりにも遅すぎるからこそ動きが目に留まらない。ふと気がつけば、近づいている。お互いの忍耐を試すかのような速度で距離を詰める。

　二人の足元の水面がわずかにさざなみ立つ。同心円状に波紋が広がり、互いのつま先に当たった波だけが寄せては返す。

　水が波立つ速度よりもはるかに遅い、間合いの詰め合い。

　短剣の先端が、触れ合う。

「ッ！」

　空気が、けた。

　二人の腕が、ほぼ同時に動いた。研ぎ澄まされたが互いに手首の動脈をう。対称の動きに手首同士がまる蛇の動きで衝突し、すぐさま二の手がる。

　瞬く間に交える刃が十合を超えた。メノウもも踏み込まない。フットワークなどなく、短剣を持っている腕だけが動いている不自然なり合い。踏み込む隙を見せれば手首を切り落としてやるというが、足をけにしている。

　先に展開を動かしたのはメノウだ。手首の動きだけで、短剣を至近距離から投げる。

　狙いは胴体。発動させたままの紋章魔導【導糸】を握って投げた短剣は、急所を狙わず当たればいいというだ。

　は身じろぎすらせず、左手に抱える教典の表紙を盾にしてはたき落とす。メノウは手元から短剣という武器を失った。迂闊な攻撃で武器を手放したメノウにの凶刃が迫る──ことは、なかった。

　むしろ逆だ。

　攻撃のチャンスを投げ捨てて、が飛びのいた。

『導力：接続（経由・導糸）──短剣・紋章──発動【疾風】』

　一瞬遅れて、メノウが導力の糸をって紋章魔導【疾風】を発動。から噴出した風の反動で落下しかけていた短剣が打ち上がる。

　が動いていなければ、急所のに突き刺さっていた軌道だ。しかも一度の動きでは止まらない。

　柄から噴き出す風を動力に、短剣が宙を踊り追撃をする。【導糸】を通じ、【疾風】で短剣を動かす遠隔操作。繊細な魔導操作技術のだ。

　かつてリベールの町では『姫騎士』と呼ばれる実力者、アーシュナ・グリザリカを感嘆させた職人技だが、はできて当然とすら動かさない。ステップを踏んで回避する。重心を浮かせない動きは、水面にありながらも氷上を滑っているかのようだ。

　二度、三度と軌道を変えて四度目で直上の死角から襲い掛かった短剣を、は腕を振るってあっさりとき落とした。

　メノウは導力の糸を引いて短剣を回収する。

　先ほどの攻防中、は別角度の攻撃に対処しながらも、正面にいるメノウに隙を見せることもなかった。腕を上げた姿勢は胴体がいかにもがら空きに見えるが、そこを狙えるほど甘くはない。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【迅雷】』

　単純ながら文句のつけようのないタイミングの紋章魔導が、メノウの踏み込みを封じる。

　の短剣から放たれ水面で弾けた電撃が、じゅっと音を立てて水煙を上げる。

　メノウのみを見て、一呼吸すら置かずにが攻勢に出た。

　水音が跳ねる。

　開いていた間合いが消失する。なく急所を狙うコンパクトな突きからの、足払い。メノウは体幹を崩さぬためにを覆うブーツで耐え、反撃ので側頭部を狙う。先ほどまでの腕だけの刃の突きつけ合いとは対照的に、全身を使った体術の応酬だ。ほとんど拳闘と変わらないインファイト。刃と肉体がぶつかり合って加速する戦闘に、メノウは徐々に導力出力のギアを上げていく。

　どくん、と魂が鼓動する。魂のつながりからアカリの導力が供給される。さらに肉体の性能を上げた踏み込みが派手な水しぶきを上げる。

　動きの強度を上げながら、技の精度を下げることなくメノウは自分の体をアカリの導力に慣らしていく。既にメノウの肉体能力を上げる導力強化は未体験のゾーンに突入しつつある。

　もともとメノウの導力量は、並みの神官として及第点というレベルでしかない。戦いに身を投じることを義務付けられる処刑人の中では、導力量の才能なしのを押されていた。

　その欠点は、もう、ない。

　の目がメノウを見据える。

　の視線に焦りはない。明らかに自分を上回る導力強化を相手にしながらも冷静そのものだ。なにか対策があるのか。に浮かんだ疑念はそのままにメノウは短剣を振るう。のことだ。あるに決まっている。ないと考える甘えなど、とっくの昔に捨てている。あらゆる強敵を敵に回して、勝利を重ねたのが『』だ。

　敵となった彼女の危険は知っている。

　知って、彼女という伝説を超えるのだ。

　メノウが短剣で斬りつける。

　力強いに、きぃんと音を立てての短剣が真上にき飛ばされる。受け止めきれなかった衝撃に、がのまま体勢を崩した。

　チャンスだ。

　無防備に見えるの姿がメノウの心にある傷口をうずかせる。

　前の一戦。聖地の大聖堂内部で戦った時に、似た状況があった。

　──どうも、殺さないでくれてありがとう。

　確実に刺し殺せる瞬間があって、チャンスを放棄した。メノウはの喉元に刃を突き刺せなかった。

　『』が、メノウにとって誰よりも特別な人だったから。

　けれども。

　いまは、アカリが後ろにいる。

　躊躇はなかった。脳裏にささやくのをねじ伏せるまでもなく、切っ先はまっすぐ伸びた。

『導力：接続──神官服・紋章──発動【障壁】』

　見逃せばを貫く一撃は、が発動した【障壁】にまれる。

　メノウの短剣を受け止めた障壁に、亀裂が入る。ひび割れた先にメノウは視線をきつける。

　障壁のの向こうで、は大きく口を開けて笑った。

「ふッ！」

　一息。

　メノウが決意を乗せた呼気を吐き出すと同時に、短剣が障壁を叩き割る。決意が殺意となっての喉先に向かう。

　今度こそは、対応があった。

　下から、腕に衝撃。真上にり上げたのつま先が二の腕にぶち当たり、メノウの腕が跳ね上がる。

　一転してメノウの体勢が崩れる。ほぼ同時に落下してきた短剣をキャッチしたが、紋章を導力光で輝かせる。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【迅雷】』

　いま。

　メノウの意図に呼応して、戦う二人から離れた場所で魔導が展開された。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【停止】』

　いままで参戦のそぶりも見せなかったアカリの指先から、純粋概念の魔導が放たれた。

　遠くの位置にアカリを置いたのは、なにも観戦させるためではない。との戦いに巻き込まず、かつ、アカリの魔導が届く範囲にいてもらったのだ。

　導力接続によってアカリはメノウの記憶を共有しているが、メノウのように動けるわけではない。メノウの戦闘術はメノウ自身に最適化したものだ。武器も持たないアカリがメノウの動きを参考にすれば、どんなが出るかわかったものでない。まして、ほどの相手にぶっつけ本番で不完全な接近戦を挑むなど、恐ろしいにもほどがある。

　だからこそ、遠距離で魔導を放つ砲台としてアカリを配置した。

　指鉄砲から放たれた【停止】の狙いは足を上げて体幹が固定されている、ではない。隙を狙ってすら、を直接狙ってはけられる恐れがある。

　雨によって広がり、塩の大地を鏡面にしている水面に【停止】の魔導が当たった。

　水面の時間が停止する。靴を水に浸したままならば、時間がまった液体は強固なめに変貌して逃れるなく足元を固定する。

　アカリの発想ではない。つながった意識を通してメノウが伝えた策の一つだ。言葉にするまでもなく意図を共有できる導力接続は連携面で大きな恩恵をもたらす。アカリがのままだったら、高度な駆け引きが瞬時に繰り返される戦闘に割って入ることなど不可能だった。アカリがメノウの思考を自分のことのように感じとれるからこそ実現した絶妙のサポートだ。

　蹴りで片足を軸にしていたには、逃れる術がないはずだった。

「む」

　一文字なのに、残念無念だと雄弁に伝えるアカリの声がメノウの耳に届く。

　の足元が【停止】した水面に捕らわれることはなかった。アカリの魔導が着弾した瞬間だけ、の足元の水が蒸発していたのだ。

　アカリが【停止】の魔導を放つ直前にが放った【迅雷】の紋章魔導は、メノウへの追撃にではなく、自分の足元に向けられていた。

　完全にアカリとメノウの連携を読んでいなければ不可能な行動だ。

　処刑人として暗躍していたメノウが『』と称されていることからもわかる通り、メノウの戦闘方法はすべてから叩きこまれたものだ。思考を読むことなど造作もないとメノウたちの連携を見切って対処した。

　無駄撃ちに終わった【停止】が解かれ、水面の時間が戻る。策が一つ、失敗した。悔しがるアカリとは違い、メノウは気落ちすることなく距離をとる。

　メノウは静かに息を吐く。

　瞬く間に状況が変わっていく。めまぐるしくも張り詰めた戦いを繰り広げながらも、気分は悪くなかった。

　研ぎ澄まされた心と、戦闘の興奮が奇跡的なで釣り合って同居している。戦いの場で、以外のことを考えていない。自分自身も、そして他の誰でもない大切なアカリも、いまだけはを打ち倒すためだけに使い倒すことに、迷いはない。

　不思議だ。

　と刃を交えるたびに、くっきりと自分が浮き彫りになる。

　この戦いはメノウが世界を変えるための、第一歩だ。

　自分たちが歩き続けるために必要な試練。アカリとともにる道を歩くため、これから先に手に入れなければならないなにかを、この人に勝てばめる。

　メノウの意気を感じて、アカリもやる気をみなぎらせる。導力接続から伝わる素直なアカリの反応に、内心でむ。

　があるとすれば、一点。

　まだの導力強化を置き去りにできないことだ。

　いまのメノウは、すでに普段のモモ並みの導力強化で全身を強化している。め手を含めた戦闘ならばまだしも、が真正面の体術戦で打ち合える段階を超えているはずだ。

　だというのに、はいまのメノウの動きに追随している。

　の導力量は元のメノウと大差ない。いまのメノウの導力強化についてこられるはずがない。なにかりがある。少なくとも個人の導力ではない。

　なにがの導力量を底上げしているのか、めるために集中する。

　の装備はいつもと変わらない。【導枝】と【迅雷】の紋章が入った短剣。【障壁】紋章のある神官服。そして左手にある教典。額の飾り玉も導器だが──あれの効果は、メノウも知っている。導力量の底上げとは関係がない。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導枝】』

　無言のまま、が紋章魔導を発動させる。

　短剣から伸びあがった導力の枝が、一本の大木となる。の姿を幹に隠すほどの巨木。【導枝】を使った大規模な儀式魔導が展開されるのかと身構えたが、違った。

　ぱきん、と音を立てて、光り輝く巨木が倒壊する。地面をわずかに振動させて地面に倒れ込んだ巨木の後ろに、の姿はなかった。

「うわ」

　アカリのらした声が、メノウの耳まで届く。声にこそ出さなかったが、悔恨はメノウも同じだった。

　の姿が消えた。

　白と青の光景に映える彼女の姿が見えなくなった理由は単純だ。

　導力迷彩。

　導力強化の高度な応用だ。身に纏う導力光の色を変えることで、姿を偽る変装術。は景色と完全に同化することで、メノウとアカリの視界から消失した。

　姿が消え去ると同時に、気配も完全に絶たれている。いま彼女がどこにいるのか、メノウとアカリにはわからない。

　はアカリのように瞬間移動ができるわけではない。確実に周囲のどこかにいる。の存在が確信できるからこそ、彼女の姿が見えないという事実が重くのしかかる。

　『』は戦士として伝説になったのではない。

　彼女の本質は暗殺者だ。

　まともに刃を交え、魔導を撃ち合う必要などない。姿を消したまま背後から心臓を一突きすれば、人は死ぬ。人質不意打ちだまし討ち。と呼ばれるあらゆる手段を用いて人を殺してきた彼女からしてみれば、メノウと正面から戦わざるを得なかったこの盤面こそが不服なはずだ。

　メノウが導力量に不審を抱いて観察に回った途端、戦法を変えてきた。もし無警戒にの導力強化を低く見積れば、その油断を突く気だったに違いない。

　神経を尖らせる。導力迷彩での隠形は姿こそ見えないが実体はある。移動に足元で波紋が立つことを期待したが、広がる水面に不自然な動きはない。わずかな物音も、視界の違和感も見逃すまいとしても、メノウの知覚はを捉えることができなかった。

「……」

　戦況が、止まる。

　じりじりと時間が消費される。

　メノウの胸中に焦りが生まれる。

　周辺を制圧する教典魔導を放つべきか。アカリの導力を引き出して打ち放てば、逃げ場がなくなるほどの威力になる。見えない相手に対して有効な手なのは間違いない。

　メノウも本来は、相手の裏をかく戦法をとる。しかしアカリとの導力接続によって巨大な【力】の供給を受け取ることができてしまったため、正面勝負で押し切ることにこだわった。そして事実、いまのメノウにとっては一番勝率が高い戦法が力押しによるものだった。

　だが教典魔導に集中する瞬間を突かれたら？　メノウのほうならばいい。直前に察知できる自信がある。だが、アカリは？　自分が教典魔導に集中している時にアカリが狙われた場合、対処ができない。導力接続でメノウの経験を共有したといっても、彼女の主観はアカリのままなのだ。

　メノウが狙われているか、アカリが狙われているかがわからない。しかしアカリは死なない。【回帰】による復活がある。……本当に？　が『塩の剣』に代わる、不死性を貫く武器を持っていないと言い切れるのか。アカリは死なないというメノウの前提を、あっさりと覆してきそうな怖さを持っている。アカリなら短剣で刺された程度では死なないからと捨て置く気にはならなかった。

「…………」

　無言の時間が続く。を伝った汗がから水滴となって落ちた。

　ぴちょん、と音を立てた一滴が波紋を広げる。

　アカリの分まで気を払うメノウのプレッシャーはすさまじいものがある。

　相手がメノウだけならば、このまま消耗戦に持ち込めただろう。

　だが、メノウとは考え方の違うもう一人がここにはいる。

「メノウちゃん、考えすぎ！」

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【断裂】』

　導力光を宿すアカリの指先が、くるりと円を描く。

　全方位に、断裂の一閃が放たれた。

　直後、メノウの背後で空気が揺れた。自分を乗せてひそかに伸ばしていた【導枝】ともども導力迷彩をしていたは、アカリの魔導を回避するために動かざるを得なかったのだ。

　メノウは振り返る間も惜しんで、前方に身を投げる。の刃がをかすめる。狙いは、メノウのほうだった。後ろを見ないまま、ほとんど勘で蹴りを飛ばす。

　運よく、足先に引っかかった。

　威力のない蹴りだったからこそ、は対応し損ねた。つま先がかするようにに触れた箇所から、メノウは導力を流し込んだ。

『導力：接続──』

　魔導発動のための導力操作ではない。触れた先からの肉体へ、メノウの導力を流し込んで相手の精神へと入り込む。グリザリカで赤の魔導兵相手にも行った、導力の相互接続とは異なる一方的な相手の精神への侵入だ。

　初めての表情が変わった。明確なち。の拒否がメノウの精神を排除しにかかる。

　違う人間同士の【力】は相反する。アカリのように無条件で流入を受け入れられていない以上、いくらメノウが特異な体質であろうとも他人の精神に干渉し続けられるものではない。ましてや、いまがしているのは導力接続に対する明確な拒絶だ。

　だが一瞬でいいのだ。メノウが探りたいのは、の導力を底上げしている要因だ。

　塩と化したこの地の地脈は完全に枯れている。大気を流れる天脈につながる経路もない。アカリと導力接続をしているメノウは例外として、外部から導力を得られる要因はないはずだ。メノウは、と導力接続をした刹那の時間で不審点を洗い出そうと画策した。

　試みは成功した。

「……教典？」

「ちッ」

　メノウのきにが舌打ちをする。

　の持つ教典が、異常な量の導力の供給元になっている。メノウがアカリから受け取っているほどの量ではないが、底は見えない。

　だがメノウの知る限り、の持つ教典に導力を生成する機能はない。そもそも導力を生む物質など、ほとんど存在しない。

　導力は、一部の例外を除けば生物の魂から生成される。

　逆説的に、物質に魂が宿れば、それは導力を生成する道具になりえる。

「人体の……導力生命体化現象」

　苦々しさとともに、の教典に生じている現象名を告げる。かつてメノウがサハラにしてしまったことを、おそらくは意識的にやっている。しかも教典に閉じ込めて利用している魂は異世界人だ。普通の人間の導力量ではない。

　は肯定も否定もしない。だがメノウは、あの一瞬の導力接続で確信していた。

　史上最多の禁忌狩り。伝説の処刑人『』。

　誰よりも禁忌をしてきた彼女がどうしてと思わずにいられないのは、メノウに残った神官としての良心なのかもしれない。長年の教育でみついた、禁忌は禁忌であるという思考だ。

　それこそ、メノウが言えた義理ではないというのに。

　メノウの心中など手に取るように理解しているのだろう。に焦る様子はもない。当たり前のように無言のまま、短剣の狙いをメノウに定める。

　と自虐は、胸の奥底にしまい込む。感傷に浸れる余裕などない。

「。その教典、なにを閉じ込めているんですか？」

「……ちっ。ここまでだな」

　は答えなかった。

　苦々しく悪態をついたが、額の飾り玉に触れる。

『導力：接続──緑玉・紋章──発動【条件起動】』

　条件起動式。魔導具に起動条件を刻んで発動させることができる。

　どの導器に、なんの条件を刻んだのか。警戒するメノウたちには語りかける。

「メノウ。お前たちがここに来る時に、なにを使ったか覚えているか？」

「……『龍門』です」

　突然の問いに警戒しながら答える。

　もとは巨大な大陸であった塩の大地は、メノウたちが住む大陸とは海を隔ててか彼方にある。

　長大な距離をねじ伏せたのが、聖地の最奥に隠されていた施設『龍門』だ。人類がもっとも繁栄していた古代文明期からきる駅ホームに似た施設を使って、長距離転移を可能とする転移の門を生成したのである。

「そうだな」

　もっともらしくいたが、言った。

「この大地につながった転移の門の真下に条件起動式のを埋めてあるとしたら、どうなるかわかるか」

　アカリが顔を引きつらせた。表情にこそ出さなかったが、メノウも同じ気持ちだ。

　導榴弾。

　導力銃と同じく、魔導の心得がなくとも使える導器だ。

　繊細な儀式魔導の産物である転移の門を壊すのはい。ただ他に帰る手段がない以上、にとっても不可侵なものだと無意識に考慮すべき対象から除外していた。

　だがメノウの思い込みによるタブーは、やすやすと踏みにじられる。

「起動条件は、簡単だ。あと十分後にする」

　もしそうなれば、ここにいる三人は絶海の孤島に取り残されることになる。

　この大地には水と塩以外には、なにも存在しない。

　はふてぶてしく笑った。

「どうだ、メノウ。いつだかの訓練の成果を発揮してみるか？」

「そういえばありましたね、塩と水で一か月ほど限界生活をさせられたことが」

　修道院時代に冗談のような訓練をさせられたのは、懐かしい笑い話だ。昔、モモと一緒に一か月塩と水だけで過ごすという懲罰じみた限界訓練をやらされたことがあった。

　メノウは舌で唇を湿らせる。

　こんなことを言い出した時点で、は戦闘を続けてもメノウとアカリに勝てる見込みが薄いと白状したも同然だ。自分が帰れなくなるのを承知で転移の門を破壊するというのは、勝てないからこその引き分け狙いでしかない。

　いうまでもなく、戦力を分散させるのは悪手だ。メノウとアカリを引き離すであることは理解している。

　理想的な展開は、メノウとアカリの二人がかりですぐにを倒して聖地に戻ることだ。

　だがメノウとアカリの二人がかりでも、十分以内で確実に勝てる保証はない。もしこのまま戦闘を再開すれば、がのらりくらりと時間を稼ぎにくることは目に見えている。制限時間を知らされた以上、時間が経過すればするほど気持ちが焦り、取り返しのつかないミスを犯す可能性もある。

　どちらを選ぶか。

　リスクを考えれば、迷うまでない。

「メノウちゃん」

「任せたわよ」

　アカリの呼びかけに、短く言葉を返す。

　罠だとわかっていても、行かなくてはならない。導榴弾を仕掛けたという言葉自体がブラフの可能性もあるが、確認しないわけにはいかない。ここに取り残されたら、帰れる手段はない。空間に干渉できるアカリの【転移】でも、海を越えて聖地までの超長距離を超えることは不可能なのだ。

　アカリの全身に、導力光のがまとわりつく。

『導力：接続──不正定着・純粋概念【時】──発動【転移】』

　ぱっと光が弾け、アカリの姿が消えた。【転移】の魔導で移動したのだ。短距離であれば、アカリは空間に作用する魔導も使える。いまのアカリはメノウとの導力接続で記憶を補完したばかりだ。いまの彼女がになる恐れはない。勝負が終わった後に再度導力接続をすれば、消費した記憶もメノウから伝わって元通りになる。

　が仕掛けたという導榴弾を探す時間を含めて、どんなに長く見積もっても五分以内に戻れるはずだ。

　今度こそ改めて、一対一で師弟が向き合う。

　がこれ見よがしに伝えた意図は明白だ。

　この五分で、は勝負を仕掛けてくる。

　来たる猛攻をしのげば、メノウの勝ちだ。

　は不利な状況にありながら、この短時間でメノウたちを分散させて戦闘力をぐことまでしてみせた。

　やはり、手ごわい。

　敵が手ごわいというのに、笑ってしまう。場違いな喜びが止められない。不思議だ。メノウは戦うのが好きだと思ったことはない。好戦的な性格からはほど遠いはずだ。

　けれども、と刃を交えるたびに知らない自分と出会える。

　それが、たまらなく楽しい。

　先ほど切り裂かれた頰から血がにじむ。メノウはアカリとの導力接続の同調率を下げる。別の場所で地面を探っているアカリの感覚まで感じてしまうのは悪手だ。別々のことを対処している最中に、注意力が散漫になれば命とりである。

「ん？」

　いま、一瞬なにかの疑念が頭にひっかかった。

　地面を、探る。

　それに、なにかが──。

　いや、と頭を振る。直感的にいまの戦いとは関係のないことだと悟っていた。思考のリソースは有限だ。重要ではないことに思考を回すほどの余裕はない。

　導力の供給はあるものの、共感はだいぶ薄まっている。距離も関係しているのか、アカリの様子は感じられない。

　つながりが遠ざかることへの、わずかな喪失感。だが感応の余韻に浸っている暇などない。

　感覚が切り替わったタイミングで【導枝】が迫る。舌打ちをしながら回避。前に出る。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導糸】』

　もっとも手慣れた紋章魔導の発動に、ふと記憶が呼び起こされた。

　そういえば、昔、にを褒められたことがあった。

　詳しい台詞までは覚えていない。ただ、褒められた事があったという事実を思い出した。修道院にいた時なのは間違いないが、本当にな褒め言葉だったはずだ。もしかしたら幼いメノウが褒められたと勘違いしただけで、褒め言葉ですらなかったのかもしれない。

　裁縫に関してメノウは基本を修めた程度で、後輩であるモモのほうが情熱をかけてずっとうまくなった。

　それでもメノウの記憶にはに褒められた数少ない思い出が残っていた。

　短剣に魔導紋章を刻む時、導力の糸を生み出す【導糸】を選んだのは、それだけが理由だ。

　誰よりも『』の薫陶を受けながら、なにもかもをと同じにはしなかった。

　きっとメノウは、と並び立ちたかった。

『あなたになりたい』と願った時から、ずっと。

　だから、思い残すことは許されない。

　メノウは全身全霊で、との戦いに没頭した。

　のない施設で、小さな足音が響いていた。

　メノウとアカリが塩の大地にたどり着く前のことだ。『』によって連れ去られたアカリを助けるために、メノウは聖地を崩落させることを選んだ。聖地の建造物のほとんどが魔導結界である特性に着目し、結界都市を維持させていた地脈を寸断することで、聖地を丸裸にした。

　結界としての機能を失った聖地には、二つの施設が残っている。

　ひとつは列車駅ホームの形をした、古代文明期に敷かれていた導力路の出入り口──『龍門』。

　大陸に張り巡らされた地脈を通して世界各地へと物資と人材を送り届けることができる転移の門をつくる要の施設だ。古代文明期には、町ごとに必ず設置されていたほどにありふれた『駅』でしかなかったが、いまでは長距離転移の門をつくれる唯一の古代遺物となってしまった。

　そして、もう一つ。

　地下深くに構造を広げる円柱形の建物。人類史の記録と記憶の保護を目的とした施設『星の記憶』だ。

　口で伝える物語ではなく、文字に書き記す記録ではなく、記憶を丸ごと引き出すためにつくられた施設だ。人類が住まう星を魔導現象だと見立て、千年前の当時には完成していた導力による通信ネットワークを掌握して完成した。

　純粋概念の魔導行使のたびに記憶を失っていく異世界人たちにとって、精神の担保となる施設は命綱だった。

　これもまた、古代文明期に一人の純粋概念を利用してつくり上げられた施設だ。記録媒体が本の形をしているのは、『星の記憶』のとなった純粋概念の影響が大きい。

　偉大な施設だった。壮大な目的があった。そのために、幾度もの実験が繰り返された。魔導研究者による理論が組まれ、幾度となく動物実験が行われ、人体への臨床実験へと発展した。

　地上へつながる階段を上がっていた人物は、胸中をよぎった過去の記憶に顔を歪めた。

　階段を上る音が、途切れる。発作をこらえる仕草で胸を押さえて、しばし立ち止まっていた彼女は、再び歩き出した。

「忘れられないってのも、嫌なものだね……」

　ゆっくりと地上に近づいているのは、セーラー服を着た少女だ。まだ若く、二十歳には至っていない。腰を超えて伸びた黒髪は長年切り揃えていないことをうかがわせる。特に前髪が伸びきって、彼女の顔を半分以上隠してしまっていた。

　それでも彼女の美貌は隠しようもない。

　すらりと伸びた手足に、素晴らしく整った頭身バランス。片目しかあらわになっていない瞳を彩るまつ毛はめかしいほどで、隠れたもう半分をいたいと期待をる。肌が真っ白なのは、生まれつきの素養にくわえて、ひたすら外に出なかったからだ。

　長年施設の奥にいたが、別段、彼女は閉じ込められていたわけではない。出ようと思えばいつでも出ることはできた。

　ただ、おっくうだった。

　動くことも、考えることも、生きることがただただ気だるく面倒だ。

　鋭気に富んでいた彼女の精神を緩慢にせしめたのは、千年の間に積み重なって、もはや薄っぺらくしか感じられなくなった人生そのものだ。

　彼女は、不意に自分の手のひらをじっと見つめる。先ほど、珍しい来訪者がいた。の、マノン・リベール。一冊の記憶を求めたマノンを、彼女はる余地なく消失させた。消滅したマノンのことも決して忘れることが不可能な虚無の一つとなって、彼女に積み上がるのだ。

　人を壊すことに、いささかの心痛も覚えなくなって、果たしてどれくらいつか。

　足を、地上へと進めていく。

　片目だけのぞく彼女の瞳には、虚無があった。

　彼女本人を除いて、この虚無に共感できる知性を持つ者は、ほんの数人しか世界にいない。人間が抱えるはずもない時の積み重ね。飲み込みすぎて自己を変質させていく【力】。忘れることで自分をすり減らす異世界人のあり方とは、真逆だ。

　忘れないため保護した精神は、無限に記憶を積んでいく。真っ黒なに似て、けれども本質的には色などない。

　自分の魂に定着した純粋概念──【白】。

「疲れた……」

　嘆息した彼女は、周囲の本棚から一冊の本を抜き取る。神官になった時に与えられるの教典は、この施設と繫がっている。にとって最大の武器である教典が世界に散在している限り、神官の周囲で起こったことは彼女にとって検索可能な事柄になる。

「『』と戦っているんだ……」

　遠くの戦いをのぞき見て、本を戻す。

　この世界は、本当ならば、とっくの昔に滅んだはずの星だ。古代文明期は滅ぶべくして滅んだ。

　衛星を飛ばして気象の観測と干渉を繰り返し、大地を開拓し尽くしては新たな資源を求めて、あらゆる概念の獲得に勤しむために召喚を多発させた。

　誰が知っているだろうか。

　いまでは四大と呼ばれる存在の前身となった者たちも、『主』と呼ばれて聖地の奥底に潜む彼女ですら、ただの被験者でしかなかった時代が人類の最隆盛だった。

　たくさんの人を救い、多くの場所を旅して、信頼できる仲間がいた。

　だからこそ、知っている。

　少数の誰かが支えなければ滅びるということは、少数に大多数が滅ぼされるリスクを抱えていることに他ならない。

　だから、いいと思うのだ。

　自分が星の全部を利用するくらい構わない。許してくれる。自分の身に宿る純粋概念すべての総意が、彼女の背を押す。

「ボクは……」

　多くのものを飲み込んだ。私だった彼女に俺が加わり、あたしが同居して僕が顔をのぞかせる。記憶をどんなに保護しても、飲み込んでは増え続ける【力】と、長く続いて通り過ぎて重なっていく時間の影響は精神を摩耗させて変質させる。

　自分が妄執にかれている自覚はある。彼女に限ったことではない。純粋概念の行使者は、概念にみまれてとなり果てるか、妄執に取りかれるかだ。

　それでも、彼女は外に出るために扉を開く。

　すでに彼女が支払った時間は、取り返しがつかない負債となって精神をんでいる。

　いつぶりかに外に出た彼女は、立ち尽くす。日輪のまぶしさに目を細める。

「明るいな」

　すべてを清算できる機会を摑むため、彼女は地上へと、一歩、足を踏み出した。

　一人の女が施設から出たのと入れ替わりに、小さな影が内部にい寄る。

　閉じっていた人物のいなくなった施設に出現したのは、雨上がりにできる小さな水たまりを真っ黒に染め上げたような影だ。物もない床に広がる小さな影は、ポコポコと泡立ち始める。小さな黒い水たまりが加速度的に気泡を増加させ、沸騰。臨界点を超えて爆発した。

　ぱぁんとクラッカーに似た破裂音を立てて黒い影が弾けた。後に残ったのは、白いワンピースを着た幼女──である。

「まぁ！　だーれもいないわよね？」

　にしての解釈を裏返したかのような行動をとる彼女にしては珍しいことに、きょろりと周囲を見渡して警戒をあらわにする。

　彼女は少し前まで施設内部へ侵入することに、二の足を踏んでいた。

　聖地に張り巡らされていたような結界があるわけではない。むき出しになった建物は無防備だった。マノンが潜り込めたのである。能力的に考えればが侵入できない道理はない。

　単純に、図書館内部にある気配がの足を鈍らせていた。

　としての本能が、嫌悪を感じていたのだ。

　人類の記憶図書館『星の記憶』の中には、あらゆるが出会ってはいけない者がいる、と。

　懐かしいような、忌まわしいような、憐れなような気がする元凶の気配は少し前に外へ出た。本人が立ち去った後の【力】の残り香ですらに忌避感を抱かせるものだったため、マノンが内部に侵入したとはいえ、そのままならばが近寄ることはなかっただろう。

　だが先ほど、記憶図書館の中でマノンの反応が消えた。

　嫌な気配がする存在は、いまは記憶図書館から離れて聖地の跡地にいる。それに気がつかれないように気配を消しながら、ぺたぺたと素足のまま内部を進む。

　中に広がる光景は図書館だ。はそれがなんなのか、知っていた。

　大陸中の情報と、人の記憶。膨大な精神的パノラマの物質化。かつて古代文明期に、世界の情報をろうとした施設のごく一部だ。

　記憶を収める情報媒体としてつくられた導器は、本の形をしている。魔導的に最も適した形がそれだった。周囲にある記憶群には、特に興味がひかれる要素はない。

　最奥にたどり着いた彼女は、ひょいっとしゃがんで下へと視線を向ける。

　そこに倒れているのはマノンだ。

　硬質な床に崩れ落ちている彼女の体は、見るからに冷え切っている。脈などとるまでもなく、命を失っているのは明白だった。

「まあまあ、まぁた死んじゃったのね」

　ためらいも気遣いもなくマノンの遺体をぺたぺたと触っていたは落胆に肩を落とす。

　マノンの死体には影がない。が彼女の魂を収納するためにつくった部分が欠損したのだ。

　が気ままに操る原罪魔導は、魂に触れることが可能な数少ない魔導だ。死後、さほどの時間が経過していなかったらげるしだいで、拡散した魂を再構成して擬似的な死者すらできる。

　だが目の前にあるマノンの死体はダメだ。

　肉体はまったくの無傷なのに、魂だけがに抹消されている。が原罪魔導でマノンを呼び覚まそうとしても、魂がないのならばそれは姿だけをた肉人形だ。マノンに似せた魂をつくることはできるが、い物にしかならない。

　気が合う少女だったが、死んでしまったのならば仕方ない。にをついてをしながら落胆する。

　無駄足に嘆息して立ちあがろうとした時だ。

『導力：生贄供犠（条件要項・了）──原罪ヶ印怠惰・肉体──召喚【原罪ヶ悪・遺恨】』

　マノンの遺体を起点に原罪魔導が起動した。

　発動した魔導に動きを止める。

　魔導行使者がいないのに発動したとなると、事前に条件起動式を仕込んだ魔導だ。マノン自身が自分の体に発動条件を刻み込んでいたのだろう。自分の魂の消失を条件にして、遺骸を生贄に捧げての原罪魔導である。

　魔導発動と同時に、さらさらとマノンの肉体が朽ちていく。遺骨も残らず、黒い灰となる。原罪魔導は望む力を召喚する対価として、必ず発動者から生体的なものを生贄として要求する。死んでいても容赦なく肉体をむしり取られた末に召喚されたのは、かりそめの命を吹き込んだ影だった。

「ま？」

　黒一色のために人相の判別は難しいが、からしてマノンの似姿であることは疑いようもない。

　平面的でありながらも、が指でつつくと弾力のある感触が返ってくる。召喚のために捧げられた生贄から考えると、マノンの輪郭をった影に自意識が込められた可能性はない。ただ直前に定められたマノンの意志を全うすべく動く影人形だ。

　薄っぺらな影が、床に落ちていた本を持ち上げる。

　差し出された本をが受け取ると同時に、マノンの影はわずかばかりの力すら失い四散した。

「マノン？」

　呼びかけても、すでに影は散って跡形もない。マノン・リベールは遺体すら残さず、衣服だけを置いてこの世から完全に消滅した。

　一体、になにをしたかったのか。は小首をげる。

　情報を本という形にして閉じ込めた導器。古代文明期に実用化された、知性ある生命の精神を宿すことができる特殊な記憶媒体だ。とある純粋概念の【力】を行使して作成された特殊な導力情報回路は、精神を通じて人間の記憶を模写することを可能とした。だがには記憶を補塡することすら困難だ。常時発動させている概念魔導の規模が大きすぎて、補充する先から記憶が干からびる。ここにいるは小指であり、遠く離れた【魔】の本体から分離した存在であるために記憶の消費はやかだが、の一部であることに変わりない。現在進行形でいまの記憶すら消えていく。

　マノンが遺したものだ。なんの記憶があるのか、もしかしたらマノンの記憶が込められているかもしれない。どんな記憶があろうと忘れてしまうということには変わりないのだが、内部に蓄積された情報を読み取るために記憶媒体に導力接続した時だった。

『導力：世界接続 ── 教典・憲章三条 ── 発動【我らの世界は言語を絶する】』

　本の内部に貯蔵されていた精神が、幼女の肉体に流れ込んだ。

　中に封じられていた精神が幼い体を駆け巡り、彼女の精神に染みる記憶を定着させる。

　同調は一瞬で、けれども効果は劇的だった。

「……」

　本に手を置いていた幼女が、口元を震わせる。

　目を動かす。改めてマノンの遺体があったはずの床を見て、すでに服しか残っていないことにとする。すら残さずに消え去った彼女が、自分にとっての誰だったのか。いまの彼女には理解できてしまった。

　彼女は、いま自分の身になにが起こったのかを理解していた。視線を巡らせて、いまいる場所を確認する。と目を見開いた表情で、腕を震わせる。先ほどまで目にしてなにも感じなかった情景が、すべて裏返る。

　目もくらむような、っな怒りに。

　彼女の口元から、いままで常に浮かべていたうすら寒い笑みが消失していた。手に持っていた本を両手で大きく振り上げて、あらん限りの力で床に叩きつける。

　激情の発露はそれだけでは収まらない。小さな足で、何度も何度も本をにする。非力で、軽い体重で、情けないほど小さい音しか立たなくて、それでも続けざまに踏みつける。

「このっ、この……！　よくもッ、こんなこと……！　あいつは、まだ続けてッ！」

　彼女の性質を知っている人間が見れば、あっけにとられただろう。それほどに『』というにはそぐわない言動だった。

　肩で息をした彼女は周囲を見渡す。その瞳は驚くべきことに、理性と感情の光がないまぜになっていた。

「ここを壊す──のは、ダメ。あたしが本体に戻ったら……飲み込まれるだけ。なら……いまの、あたしに、なにが……」

　ぶつぶつとく。声に出してと破棄を繰り返した末に方針が定まったのか。不意に幼い面相を上げる。

「外の、誰かに」

　いま聖地には、混沌が渦巻いている。そこに付け入るチャンスがある。

　瞳に決意を宿してから、頼りなく視線を落とす。

「──こわい」

　いまからやることを想像して、寄るのない自分の身の上を自覚して、ぶるりと肩が震えた。

　頼れるもののない心細さに揺れる幼女は、マノンが遺した着物をる。まったく丈が合っていない。腕を通してから手が出ない。肩に合わずにずり落ちそうになる。歩を進めると、ずるずると裾を地面に引きずってしまうありさまだ。

　自分には不似合いなサイズでもかまわずに羽織った着物のを、ぎゅっと握る。

「なんでよ……」

　四大の一角『』。

　としての彼女の跳梁ぶりからすれば、信じられないほどか弱い声。いまにも泣きそうな迷子にしか見えない。

　それでも彼女には行くべき道が見えていた。迷うことすら許されていない残酷さに震える。

　唯一遺った着物をよすがとして、彼女は自我を奮い立たせる。

　彼女の姿は小さく、頼りない。

　だって、彼女は『最弱』なのだ。誰よりも、自分自身がよく知っている。

「誰も彼も……弱いあたしだけ、残して行かないでよ」

　ひどく頼りなく力ない弱音が、誰もいない図書館に残響した。